# ごあいさつ

当館は令和3年5月に開館30周年を迎えました。令和3年度はそれを記念した企画展を開催して参りましたが、その最後を飾る企画展の主人公は長宗我部氏です。当館は、長宗我部氏の居城があった岡豊山に立地しています。ここは、土佐を統一し、四国統一まであと一歩のところまで近づいた戦国大名である長宗我部元親が誕生した地です。そのため、当館は長宗我部氏に関する研究を着実に進めることを使命の一つとして活動しており、その成果をこれまで5度にわたって特別展や企画展において展示して参りました。さらに、平成22年（２０１０）からは、長宗我部氏について詳しく紹介する「長宗我部展示室」を設け、長宗我部氏や四国の戦国時代の研究の進展に寄与して参りました。

近年、長宗我部氏への関心が高まるにつれて従来唱えられていた定説が覆される事例が増えています。その背景には、元親が生きた時代に記された古文書、いわゆる一次史料の発掘とそれに依拠した研究の進展があります。また、新たな高知県史編さんの準備が進められており、長宗我部氏が活躍した時代の古文書の収集がより一層急務となるのではないかと考えています。そこで、本展ではこれまでの展覧会とは少し趣を変え、新たな歴史像をつむぎだす材料となる古文書等に着目します。そして、長宗我部氏が生きた時代をリアルに描き出します。

最後になりましたが、これまで当館へ貴重な資料をご寄贈・ご寄託くださった皆様をはじめ、本展開催に際し、貴重な資料をご出品賜りました関係各位に、改めてお礼申し上げます。

令和４年１月14日

高知県立歴史民俗資料館
館長　田中　宏治

# 目次

ごあいさつ
目次
凡例
プロローグ　長宗我部氏のイメージ……7
1　軍記物語が語る長宗我部氏……8
2　錦絵に描かれた長宗我部氏……10
Ⅰ　土佐史の開拓者　秦山と正明……12
1　先駆者　谷秦山……13
2　後継者　奥宮正明……15
3　秦山と正明の師弟愛……20
Ⅱ　古文書の世界……36
Ⅲ　多様な史料……47
1　古文書に準じる一次史料……48
2　写……51
3　「伝」を伴う史料……58

Ⅳ　後世における長宗我部氏へのまなざし……63
1　山内氏治世下……64
2　他国からのまなざし……67
3　近代における顕彰……74
Ⅴ　一次史料の保存と新たな発見……77
1　史料の保存……78
2　発掘される考古資料……80
3　新たな古文書の発見……82
エピローグ　シンボルとしての長宗我部氏……88
特論「長宗我部氏研究最前線」
新出の長宗我部元親書状が語る土佐の造船　津野倫明……91
「長宗我部氏掟書」にみる戦国社会　清水克行……96
考古資料から読み解く長宗我部氏　宮里　修……101
豊臣期大高坂城下町の実像と長宗我部氏　目良裕昭……113
関係年表……121
展示資料目録……123
主な参考文献……127
協力者一覧……128

プロローグ

# 長宗我部氏のイメージ

歴史学、特に文献史学において、根拠とする史料は一次史料と二次史料とに大きく分類される。

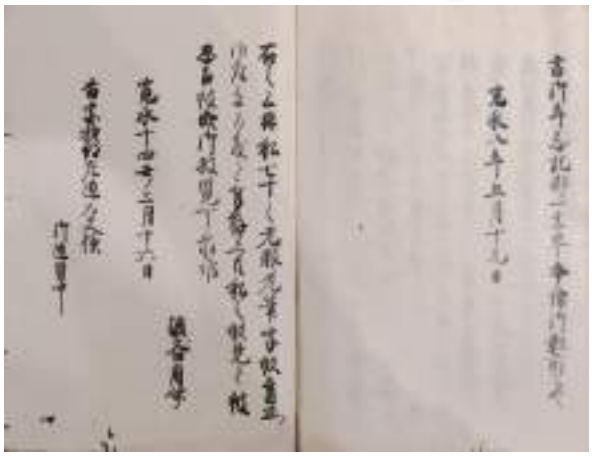
一次史料とは、同時代に作成された古文書や、日記（古記録）を指す。

一方で、二次史料とは、後世に作成された史料を指す。フィクションも多いが、出版されて民間に流布しやすかった。そのため、長宗我部氏のイメージには二次史料が強い影響を与えたといえる。

ここでは、後世に作成された二次史料で語られる長宗我部氏のイメージをみておきたい。

# 1 軍記物語が語る長宗我部氏

軍記物語とは、合戦を主題として、その時代や人物を描いた叙事的な文学作品を指す。長宗我部氏を主人公とした軍記物語は元親記が編まれて以降、いくつか世に出されている。いくさに関する様々なエピソードに脚色や空想を交えて、人々の関心をひくようにつくられており、記載内容の全てが真実とは限らない。しかし、全てが虚構であると無視することもできない。一次史料とうまく突き合わせながら、研究に用いる姿勢が重要となる。



## 元親を語る最初の軍記物語

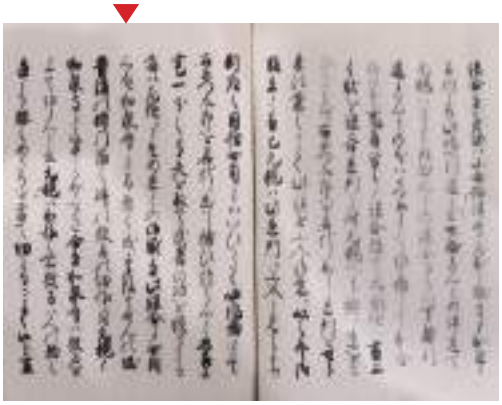
### 1　元親記

高島正重著
寛永8年（1631）成立　館蔵

元親33回忌に際して、その生涯を追想したもの。長宗我部氏に関する軍記物語の中で最も成立が早い。さらに、著者は元親に仕えた高島正重であり、脚色は少ないとされる。

一方で、一次史料と照合してみると、過誤と判断できるエピソードも少なくない。

なお、本史料は寛永14年（1637）に転写され、元親の甥である香宗我部親和に贈られたものである。

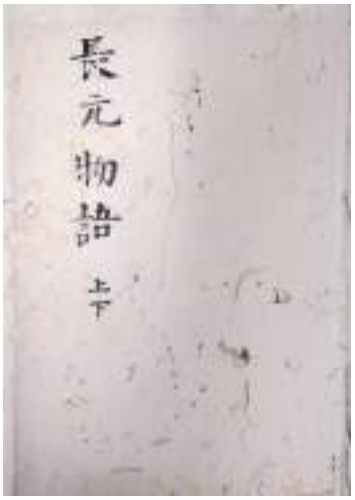


## 虚構が判明したエピソード

### 下巻「高麗赤国陣之事」

「唐入り」、いわゆる朝鮮出兵の際に、元親と、豊臣秀吉の側近の大名である垣見一直（和泉守）とのいさかいを伝える箇所。

しかし、元親と一直が一貫して懇意であったことを示すNo.127・No.128の書状の存在により、このエピソードは元親の武勇をアピールするための虚構であった可能性が指摘されている。



## 冷静に元親を語る

### 2　長元物語

立石正賀（貞）著
万治2年（1659）成立カ
館蔵

長元記ともいわれ、箇条書きの形式で長宗我部氏の盛衰（せいすい）を記す。著者の立石正賀は元親の家臣であり、伊予（愛媛県）方面で戦功があったという。そのため、南予攻戦の記述については信頼が置けると評価される。一方で、著者の記憶によって記される箇所も多く、年月を欠き、誤謬（ごびゅう）もみられる。

## 長元物語を加筆

### 3　土佐軍記

著者不詳
元禄年間（1688～1704）成立カ　館蔵

元親による四国平定戦の叙述（じょじゅつ）を中心とし、「四国軍記」の別称を持つ。長元物語は元親の秀吉降伏で終わるが、こちらは、子息である盛親の死までを記す。

## 一次史料と元親記に依拠

### 4　土佐物語

吉田孝世著
宝永3～正徳3年（1706～13）成立　館蔵

元親に仕えた吉田政重の孫である孝世（1645～1727）が著した。孝世は、土佐藩記録方御用を務め、山内家伝来文書の整理に当たった。そのため、元親記などの二次史料に加え一次史料にも依拠しながら、土佐物語を書き上げた。一般に流布（るふ）しており、大衆的な読み物としては成功している。

## 土佐物語同様に脚色

### 5　長宗我部盛衰（せいすい）記

中田好賢著
安永3年（1774）成立
館蔵

谷秦山（じんざん）の孫で、儒学者の谷真潮（ましお）が序文（じょぶん）を記す。冒頭において『土佐物語』が『古城伝承記（こじょうでんしょうき）』を潤色（じゅんしょく）したに過ぎないと指摘するが、こちらも脚色は多いとされる。

# 2 錦絵に描かれた長宗我部氏

錦絵とは、浮世絵の多色刷り木版画の総称である。その画題の一種として、甲冑姿の武者を描いた武者絵がある。初期の武者絵は『平家物語』や『太平記』などの合戦場面を描いた作品であったが、江戸時代中期以降には、流行の読み本や、歌舞伎など多方面から取材された。そのため、長宗我部元親やその周辺の人々を描いた作品も残されている。同時代のものではないが、江戸時代の人々が長宗我部氏に抱いたイメージがわかる。

## 髭をたくわえた姿

6　大日本六十余将　土佐長曽我部秦元近

芳虎画　慶応2年（1866）成立　館蔵

題名の「大日本六十余将」とは、日本の旧国である60余りの国でそれぞれ活躍した武将を紹介するシリーズ。土佐を代表する武将として元親の姿を描く。ひげをたくわえた猛々しい姿を描いている。

## 明智光秀重臣の姿

7　月百姿　月下乃斥候　斎藤 利三

月岡芳年画　明治18年（1885）成立　館蔵

題名の「月百姿」とは、月岡芳年が明治18年から発表した浮世絵の連作。月をテーマに全100点に渡る揃物の大判錦絵である。斎藤利三は、明智光秀に仕えた。また、利三の実兄である石谷頼辰が養子に入った石谷家から元親は妻を迎えており、縁戚関係にあった。

## 加藤清正と並ぶ英雄

### 8　豊殿下四国之加藤清正長曽我部信親勇戦一騎討之図

芳虎画　明治8年（1875）成立　館蔵

天正14年（1586）に長宗我部氏も動員された九州出兵における戸次川（へつぎがわ）の戦いを描いた3枚一揃の錦絵。この戦いで元親の長男である信親は討ち死にしており、後世まで武功が伝わっていたことを示す。描いたのは、No.6と同じ芳虎である。彼は、歌川国芳の門人であったが、安政5年（1858）ごろに、その門を去った。明治初年には人気絵師として名を上げ、武者絵などを描いた。